アーティストとひらく
Opening Dialogues

TODA Sayaka: Blooms in Silence

戸田沙也加展「沈黙と花」

2025年6月28日 | 土 | – 11月3日 | 月・祝 |
June 28 – November 3, 2025



はじめに

「アーティストとひらく」は、新進アーティストと一緒に、これからの美術や美術館の可能性について考え、試行錯誤する場として実施される年１回のプログラムです。その初回となる本展では、戦後80年の節目にあたり、アーティストの戸田沙也加とともに、横浜美術館コレクションを紐解きながら、争いや共生の可能性について考えます。

1945年の夏、原爆投下により焦土と化した広島は、「今後75年間は草木が生えない」と言われました。しかし、それから約１ヶ月後の９月、爆心地から約800m離れた場所でカンナの花がひっそりと咲く姿が見つかります。

カンナは、真夏の炎天下に大きな葉の間から鮮やかな花を咲かせる、中南米原産の花です。当時、朝日新聞のカメラマンであった松本栄一は、このカンナの花を広島で撮影します。この写真は戦後、広島平和記念資料館において希望のシンボルとして語られるようになりました。

戸田は、コロナ禍の2021年より、カンナの花と、ロシアから日本に移住した友人をモチーフに作品を制作してきました。この二つのモチーフは、作家が今の日本で「平和」や「異なる地から海を越えてこの島国に根付き自生するもの」を考えるきっかけになったものです。

本展で戸田は、横浜美術館コレクションの中から、二人の画家の作品に着目しました。ひとりは小川原脩、もうひとりはジョアン・ミロです。戦争に翻弄されながらも、それぞれの立場と姿勢を貫き作品を作り続けた画家たちへの思いとともに、戸田はカンナの花と、ロシア人の友人を再びモチーフにした新作を発表します。

本展の開催にあたり、戸田沙也加氏をはじめ、ご尽力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

横浜美術館

展覧会に寄せて

コロナ禍の2021年、ロシア人の友人と共に夜の街を歩き、彼女と外来種の植物や花々を、異なる地からこの地に根付いたものたちの力強さの象徴として写真に収めました。その時に偶然咲いていたカンナの花が、重い歴史を背負っていた事実を知ったのはそれから1年後、戦争という言葉を多く耳にするようになった頃でした。

2023年以降、私的な思いから始めたパフォーマンスの記録写真〈Tokyo Canna Project〉では、平和は与えられるものではなく求めるものであることを、力強く咲くカンナの花の姿に重ねています。

今回、横浜美術館のコレクションとコラボレーションするにあたり、同館の数多の作品から「小川原脩」と「ジョアン・ミロ」の作品を選びました。歴史的背景を知るために、広島、沖縄、そして小川原の故郷である北海道へ赴き、画家たちが見ていたであろう景色を追想していく過程で、戦争を経験していない世代でありながら、徐々に戦争が近づき、身近になっていく感覚に襲われました。そして、過去の経験がいかに今という時間に深く織り込まれているのかに改めて気づかされました。こうした気づきが、創作の歩みと共に在り続けています。

国籍、言語、宗教の異なる人々が共に生きるとはどういうことか、共に生きるには何が必要か。この展示を通して、過去と現在、そして、これからをつなぐ小さな祈りが、静かに人々の心に触れることを願っています。

戸田 沙也加



戸田沙也加《Canna》2021年、インクジェット・プリント（3 枚組）



展示風景









戸田沙也加《Recording Memories》2025 年、ビデオ（カラー、サウンド、16 分）



左：小川原脩《双生児対話》1940年、油彩、カンヴァス　右：戸田沙也加《双生児物語》2025年、ビデオ（カラー、サウンド、3分）

小川原脩は、北海道の中でも雪の多く降る倶知安町（くっちゃんちょう）に1911年に生まれました。

東京美術学校に進学し、卒業してからはシュルレアリスム（超現実主義）に関心を寄せ、固有の表現を探求するようになります。しかし、戦時体制が進むにつれて表現活動への規制が厳しくなり、展覧会への出品を断念したり、制作半ばで塗り潰したりしてしまうこともありました。

小川原は、戦時期を挟んで「対話」と「沈黙」という対照的な言葉を使いながら自分の置かれた状況について考えていました。戦前に描かれた作品タイトルには「対話」という言葉が繰り返し用いられており、横浜美術館のコレクションである《双生児対話》もその一つです。

戦後は倶知安町に戻り、馬や犬などの動物や自然をモチーフに創作を続けました。小川原はこの時代を「沈黙の時代」と呼び、人と対話することがいかに困難であったかが伺えます。

《双生児対話》において、見つめ合う双子の背景には、倶知安町から眺めることのできる山、イワオヌプリが描かれています。青空に聳（そび）え立つイワオヌプリを背景に、双子は何を語っているのでしょうか。双子として生まれた私自身が、このコラボレーションにおいて、「対話」と「沈黙」の間を揺れ動いてきた小川原の心境を思いながら妹と共に「対話」を試みた映像を制作しました。（戸田）



戸田沙也加《双生児物語》2025年、ビデオ（カラー、サウンド、3分）

横浜美術館の代表的なコレクションの一つであるジョアン・ミロの《花と蝶》には、蝶、花瓶に生けられたハイビスカス、枝、そして鮮やかな葉をまとった黄色のカンナの花が描かれています。

ミロは1920年前後、故郷カタルーニャの農村モンロッチで克明な描写と記号的表現で植物や風景を描いています。自然と共に暮らし、葉脈や蝶の模様を丹念に観察し描写する。この執着とも呼べる眼差しには、ミロの自然に対する敬意とカタルーニャの風土への深い愛情を感じます。

スペイン内戦が勃発してからは、国内外での亡命を余儀なくされ、様々な抑圧を受けながらも、芸術をとおして自由への希求を示し続けました。私自身も、このコラボレーションをとおして、翻弄され、引き裂かれながらも「土地を想い続けること」の重さを改めて考える機会となりました。

2021年に初めてカンナの花と友人を撮影した地は横浜でした。そして、カンナの花が描かれている《花と蝶》が横浜美術館に収蔵されていることに、不思議な巡り合わせを感じています。(戸田)



展示風景



戸田沙也加《沈黙と花》2025年、油彩、カンヴァス



戸田沙也加《Tokyo Canna Project #1》2023年、インクジェット・プリント



戸田沙也加《Tokyo Canna Project #29》2025年、
インクジェット・プリント



戸田沙也加《Tokyo Canna Project #24》2025年、
インクジェット・プリント



展示風景

たったひとりの孤独なデモが、誰かのなかに残されていくように

大澤 紗蓉子（横浜美術館 主任学芸員）

戸田沙也加は、1988年に埼玉県川越市に生まれた。大学受験を機に長年親しんできた音楽から美術に転向し、女子美術大学洋画専攻に進学。進学後は「少女と狼」をモチーフに制作を続けた。戸田のバックグラウンドには、父親以外の身近な親族がすべて女性であったこと、女子校という環境に長く身を置いたことがある。戸田はこの経験から、女性性の中の男性性、女性の美醜といった、両義性への関心と、一般的な女性像に対する懐疑などを強く抱いていた。

大学院修了後は、生活を維持するために働き始めたこと、異性のパートナーとの出会いなどを機に、いまだ男性中心の日本社会に対する恐怖や無力感、それに相反する男性の弱さへの気づきなどから、8年ほど自分の制作への迷いが断ち切れない日々が続いた。

2021年になり、戸田は再び作品の発表を始める。そこには、絵画制作と並行して撮り続けていた戸田の写真の特異性に気づいた人物がいたこと、そして、本展の重要なモチーフであるカンナと、ロシア人の友人との出会いがあった。

異なる地からやってきたもの

戸田の制作を後押しした、「異なる地から海を越えてこの島国に根付き自生するもの。」それらは、戸田の友人がカンナを抱きしめる姿が写された《Canna》（p.3-4）に見ることができる。

この写真は、コロナ禍の2021年、戸田と友人が横浜の山下公園で偶然カンナを見つけた際に撮影されたもので、そのときはまだ、ロシアとウクライナの直接的な武力衝突は始まっておらず、戸田はカンナが戦後の日本で背負った歴史を知らなかった。撮影の翌年、戸田は広島で外来植物の調査をしたことを機にカンナの歴史を知るが、そのときにはテレビやインターネットで毎日のように、ロシアとウクライナの戦争に関する報道が行われていた。

偶然の出会いから生まれた《Canna》の意味が、短い間にめまぐるしく変化する様を目の当たりにした戸田は、この経験を手繰り寄せながら、異なる地からやってきたもの、それらを取りまく社会や政治について積極的に考えるようになった。

Recording Memories

映像作品《Recording Memories》（p.3-4）は、それまでモチーフとしてきたロシア人の友人と、初めてお互いが主体となって制作することを意図したものだ。

この作品は、友人が自身と父親が撮影した家族写真を見せながら、ウラル地方で過ごした幼少期の思い出を語るところから始まる。次いで、戸田が彼女と出会った日のことを語るシーンでは、ふたりでケーキを食べながらおしゃべりをした思い出が再演される。その際、映像には、友人が撮影した戸田の姿が映し出されるが、戸田は本作で、自分以外の他者の視点を初めて作品に導入している。

ホテルの一室から公園に繰り出したふたりは、手の甲や手のひらを近づけたり、離れさせたりする行為をしばらくの間おこない、最後は手を繋ぎながら公園を散歩する。言葉もなく、ふたりの手の動きだけが続く本作の最も印象的なシーンには、いつか離れることになっても、必ずまた出会い、通じ合おうという、関係の再構築を願うメッセージが込められている。

私たち一人ひとりは、社会や政治状況に翻弄され、ときにひき裂かれる身であるが、一方で、人と人の結びつきは、社会や政治状況を超えて、お互いの意思や願いによってその強さを保つことができるのかもしれない。

Tokyo Canna Project

2025年は、第二次世界大戦の敗戦から80年となる。いまこの国で、この戦争を経験した人はどのくらいいるだろか。総務省の統計によれば、日本の総人口の約 10.7％が 81 歳以上である（2024 年 10 月 1 日現在）。実際に戦争を生きぬき、その経験や反省から、いまの日本の平和を築きあげた人がいなくなる。そのとき、私たちはどのように平和を考え続けることができるのか。東京の街中にカンナを置く〈Tokyo Canna Project〉（p.9-10）は、こうした未来の平和に対する戸田の危機感が生んだ、「ささやかなデモ」としての作品である。*1

このパフォーマンスは、2023年に行われ撮影されたのち、その続きが模索されていた。今回、沖縄と横浜で撮影された写真が新たに加えられているが、沖縄では、街にカンナを置くのではなく、市街地に自生するカンナが選ばれた。横浜では、美術館の周辺や山下公園などにカンナが置かれていった。

この作品を機に、カンナの歴史を知った人はどのくらい増えただろうか。日常生活を送っていると、個人宅や街の植栽に、意外とカンナが植えられていることに気づく。盛夏の限られた期間にだけ咲くカンナは、海を越えて日本にやってきて、独自の意味が与えられた。街中でカンナを見るたびに、少し平和や歴史や他者について思いをはせる。こうした気づきを日常に持ち帰る人がひとりでも増えることが、戸田のささやかなデモの願いである。

*1 詳しくは、「タカザワケンジ × カニエ・ナハ × 戸田沙也加『写真と花と平和と行為』」（2024年）参照
https://www.kanakawanishi.com/tokyo-canna-project-talk-archive1（参照 2025-8-31）

作家略歴



戸田沙也加

1988年　埼玉県生まれ

2012年　女子美術大学大学院美術専攻洋画研究領域修了

現在、茨城、東京を拠点に活動

主な個展

2024年　「TOKAS Emerging 2024　消えゆくものたちの言葉なき声」TOKAS本郷、東京

2024年　「東京にカンナの花を添える」KANA KAWANISHI PHOTOGRAPHY、東京

2025年　「Voice of Silence」京都写真美術館ギャラリー・ジャパネスク、京都

主なグループ展

2020年　「ソノ アイダ #COVID-19」オンライン展示　https://sonoaida.jp/sonoaida_covid-19

2023年　「境界の肌理」Gallery Cafe ULTRA、広島

2025年　「Deconstructive Decoration（脱構築的装飾）」アートかビーフンか白厨、東京

受賞

2010年　「シェル美術賞展」入選

2010年　「アートアワードトーキョー丸の内 2010」木幡和枝賞

作品リスト

戸田沙也加《Canna》2021年、インクジェット・プリント（3 枚組）、各103×72.8 cm

戸田沙也加《Recording Memories》2025年、ビデオ（カラー、サウンド、16分）

戸田沙也加《双生児物語》2025年、ビデオ（カラー、サウンド、3 分）

戸田沙也加《Tokyo Canna Project (Tokyo, Yokohama, Okinawa)》2023-25年、
インクジェット・プリント（10 点）、80.2×120 cm、120×80 cm、77.9×51.5 cm、42×64.4 cm、
42×63.5 cm、29.7×45.3 cm、29.7×45 cm、29.7×45.5 cm、29.7×45 cm、78.1×51.5 cm

戸田沙也加《沈黙と花》2025年、油彩、カンヴァス、270×160 cm

＊以上、作家蔵

小川原脩《砂漠の花》1937年、油彩、カンヴァス、36.3×44 cm、横浜美術館蔵（小川原脩氏寄贈）

小川原脩《植物譜》1937年、油彩、カンヴァス、38×45.8 cm、横浜美術館蔵（小川原脩氏寄贈）

小川原脩《双生児対話》1940年、油彩、カンヴァス、162×130.3 cm、横浜美術館蔵

ジョアン・ミロ《花と蝶》1922-23年、テンペラ、板、81×65 cm、横浜美術館蔵

アーティストとひらく
Opening Dialogues

TODA Sayaka: Blooms in Silence

戸田沙也加展「沈黙と花」

会期：2025年6月28日ー11月3日

会場：横浜美術館ギャラリー 5

主催：横浜美術館

助成：NOMURA 野村財団

発行日：2025年9月30日

編集：横浜美術館

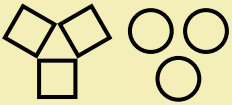
デザイン：今村圭佑

英語版翻訳：松崎由晃（本展タイトル、戸田沙也加テキスト）
クリストファー・スティヴンズ

撮影：表 恒匡

発行：横浜美術館　〒220-0012 横浜市西区みなとみらい 3-4-1

© 横浜美術館　© 戸田沙也加



横浜美術館
YOKOHAMA
MUSEUM OF ART